



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

待降節第2主日 A年(2022年12月4日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書 11章1—10節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 15章4—9節

福音朗読：マタイによる福音書 3章1—12節

## 声＝言葉＝息吹、そこに道

待降節第二主日では、毎年、福音書は洗礼者ヨハネについての箇所が読まれます。ヨハネはイエスさまの到来を準備した方です。「天の国は近づいた」(マタ3章2節)と力強く宣言したヨハネは「悔い改めよ」(同)と呼びかけます。また、待降節第二主日の朗読箇所の特徴的なのは「声」のイメージと「道」のイメージです。「荒れ野で叫ぶ者の声がある。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』」(3節)と洗礼者ヨハネは預言者イザヤの箇所を用いて語りかけます。「声」が始めに聞こえます。わたしたちはその声に呼び寄せられるようにして、呼びかける声へといたる「道」を歩み始めます。その声の主が飼い葉桶に横たえられた幼子イエスであることに気づいたとき、大きな喜びにつつまれることでしょう。この方こそ人となった神のみことば主イエス・キリストなのです。

### 【あじわいのポイント】

第一朗読では絶対的な平和がやって来ると預言者イザヤは語ります。なぜなら神の霊、すなわち神からの息吹に吹かれて、主を知る知識に満たされた方が来るからです。その方こそが、馬小屋で眠る幼子イエスです。幼子イエスに触れるとき、わたしたちは主の心を知り、平和へと呼び寄せられるのです。

第二朗読ですが、第一朗読の『イザヤ書』で示された絶対的な平和は、実現不可能な夢物語のように思えます。しかし、「キリストに倣って互いに同じ思い」(5節)を抱くなら、聖書のことばと主イエス・キリストのおかげで、「異邦人が神を…たたえる」(9節a)ようになります。こうして、「互いに相手を受け入れ」(7節)という絶対的な平和の実現の第一歩が始まるのです。途方もない平和への実現は、「キリストがあなたがたを受け入れてくださった」(7節)という事実が出発点です。ベトレヘムの馬小屋に眠る救い主は、ほほ笑みながらわたしたちを受け入れてくださいます。

ヨハネの「洗礼」は水によるもので、「悔い改めに導くため」(11節)のものでした。しかし、救い主イエス・キリストの洗礼は「聖霊と火」(11節)によるものです。ヨハネの「洗礼」は回心のため、来たるべき天の国(神の国)に備えるためでした。しかし、主イエス・キリストの洗礼は人の救いのためであり、人を裁くためのものでもあります。聖霊は人を生かし、火は人を焼き尽くすからです。ヨハネの洗礼は、イエスさまによる決定的な洗礼の準備となります。

## ミサの新しい式文に寄せて(2)

「またあなたとともに」

ミサの中の招きの言葉は、これまでは「主は皆さんとともに」、「また司祭とともに」となっていました。今回の新しい式文では「またあなたとともに」に変更となりました。

ミサの式文はラテン語が原文ですが、この部分を直訳すると「また、あなたの霊とともに」となります。「司式者の中で働く聖霊の働きとともに、わたしたちは典礼をささげます」という意味です。これは少し大切な表現です。つまり、司式者のひとがらや性格に左右されずに、司式者の中に息づく聖霊に頼りながら典礼が祝われるからです。

今回の改訂では「またあなたとともに」となりました。この翻訳の背景には日本語の文化があります。「またあなたの霊とともに」と直訳してしまうと、霊肉二元論に陥ってしまう危険性があるからです。日本語の文化では「霊」には必ずしも「身体」が伴いません。しかし、聖書が示す文化では「霊」は「身体」とともに働きます。「あなたの霊とともに」にしてしまうと、典礼の中でのリアリティが失われかねないからです。そして、司式者も会衆もリアルではないものを祝うようになりかねないからです。それを避けるためにあえて「あなたとともに」にしました。

日本語では、あえて人称代名詞を使わないのが通例です。「わたし」、「あなた」、「わたしたち」、「あなたたち」などの人を指す代名詞はよほどのことがない限り普段は使いません。しかも「あなた」とあえて使うのは、新婚のカップルのような感じがして、面はゆいです。

それでも、典礼の中で「あなた」と使うのは、共同体の皆さんの司式者への信頼が込められているからだとは理解しています。司式者が共同体の皆さんから「あなた」と呼ばれるほどに信頼と親しみをいただいている、そういった関わり合いの中で典礼、ミサがささげられていくのです。しかし、気をつけなければならないのは、「あなた」と呼ぶほどに共同体が信頼を寄せているのは、司式者のひとがらや性格に由来するのではないのです。彼(彼女)の中に働く聖霊の息吹を信じているからです。この点は司式者も会衆も気をつけなければならない点でしょう。